

研究プロジェクト

共感的対話の相互作用性

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）・長岡千賀（こころの未来研究センター研究員）

■目的

人は、心理療法のカウンセラーと対話することで、自分の抱えている悩みを乗り越えることができたり、抱える問題に対する新しい解決法を思いついたり、悩み自体を客観的に捉えられるようになったりする。こうした、話し手の心に変化をもたらす対話、心の成長を促す対話とはどのようなものだろうか。また、カウンセリングのような長期間にわたる対話を動機づける要因は何か、対話が自己認識におよぼす影響はどのようなものか。本研究プロジェクトでは、心理臨床のカウンセリング対話に特に焦点をあて、人間にとって「対話すること」がもつ意味をさまざまな角度から実証的に検討し、明らかにすることを目的としている。このため、次の2つの観点から検討を進めている。

■臨床対話のマクロ的時系列構造の解明

聴き手が心理臨床の専門家（以降、臨床家）である場合と、専門家でない人（以降、非臨床家）の場合に、話し手との対話にはどのような違いがあるだろうか。また、熟練した臨床家と経験の浅い臨床家にはどのような違いがあるだろうか。これらの比較を通して優れた聴き手、上手な聴き手のもつ特性を明らかにすることを、本研究の第1の目的とした。このため、実際のカウンセリングと非常に近い設定で収録されたロールプレイのカウンセリング対話、ならびに高校教師への悩み相談のロールプレイ対話を収録し、話し手および聞き手の発話と沈黙の構造、身体動作の同調性（2者の身体の動きがリズムカルに同期する現象）、発話形式、瞬目、周辺言語（「間」や発話速度など）などの物理量を分析指標として

分析を行った。

身体の動きの同調性を分析するために、本研究では、コンピュータによるビデオ映像解析によって身体動作の同調傾向の程度を評価する方法を開発した（小森・長岡、認知心理学研究、2010）。この手法では、同調性がどの程度の強さか（図1における色）、時間経過とともにどうに変化するか（図1における縦方向の変化）、および誰が他方にどれくらい遅れて動いたか（図1における横方向の変化）を求めることができる。「対話が全体として良い感じで進んだ」と評価された事例（高評価事例）と「対話が表層的で深まらない」と評価された事例（低評価事例）のビデオを素材にして解析した。その結果、低評価事例ではクライアントとカウンセラーの身体動作に同調性がほとんど観察されないのに対して、高評価事例では強い同調性が生じていることが示された。さらに高評価事例では、時間経過に伴って若干同調性の強さは変化するものの、対話中一貫して、クライアントの動作から0.5秒遅れてカウンセラーの動作が生じていることが明らかになった。この様子はカウンセラーがクライアントの語りの流れに「沿う」姿勢を反映していると考えられた。

■発話理解における臨床家の専門知

臨床家がクライアントの発話をどのように理解しているのかを調べるために、臨床家群と非臨床家群の実験参加者各々に心理面接ビデオの一部を視聴

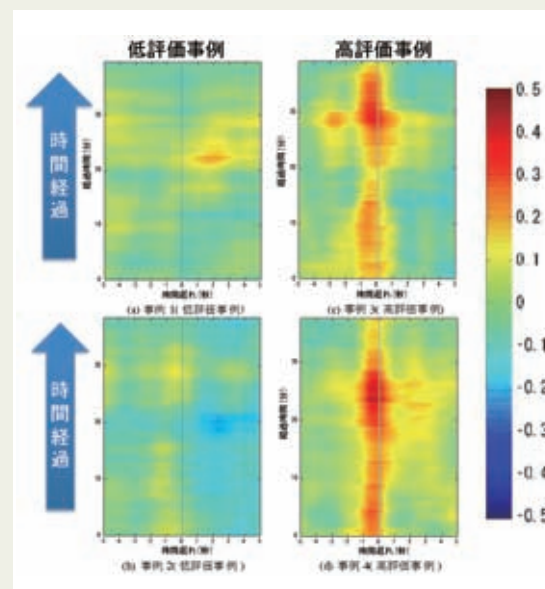


図1 クライアントとカウンセラーの身体動作の同調性

させ、クライアントの発話内容を再生させる実験を行った。その結果、臨床家と非臨床家の間、および、実践経験が6年に満たない初心者と6年以上の経験者との間に、再生量の相違が認められた。また、再生された内容を分析した結果は、臨床的訓練を受け、臨床経験を積むことによって、専門家としてのクライアントの発話理解の枠組みが作られることを示唆していた。

■今後の展望

これまで得た非言語的行動の定量的データと、クライアントとカウンセラーの発話との対応をより詳細に検討することより、上手な聴き手のもつ特性、ならびに、話し手のこころの変化のプロセスに関して考察するデータを得る。さらに、隣接領域からの批判的見解もふまえ、臨床の「知」に関わる実証研究の可能性と限界について考察する。また、これまで約7年間にわたる一連の成果を統合して書籍として出版し、「対話すること」の意味に関する新たな研究成果を発信する。